

甲状腺外科草子 162

古文復習：みだれ髪（後）

杉野 圭三

三宅香帆女史推薦の俵万智の「チョコレート語訳、みだれ髪」は二部作で後半は「みだれ髪II」で紹介されている。「俵流」の超（意）訳による与謝野晶子の短歌は現代風にアレンジされ若者にも受け入れられそうである。



その子二十櫛に流るる黒髪のおごりの春の美くしきかな → 二十歳とはロングヘアをなびかせて畏（おそ）れを知らぬ春のヴィーナス
経は苦し春のゆふべを奥の院の二十五菩薩歌うけたまへ → お経なんて読んでられない春の夕べ恋を聞いてよ二十五菩薩

やは肌のあつき血潮に触れも見でさびしからずや道を説く君 → 燃える肌を抱くこともなく人生を語り続けて寂しくないの

ゆあみして泉を出でし我が肌に触るるは苦るし人の世の衣 → 湯上りの乙女の肌を覆うのは世間という名のつらき洋服

春三月柱おかぬ琴に音立てぬ触れしそぞろの宵の（我が）乱れ髪 → 立てかけた琴に触れたる乱れ髪青春の歌はかくて生まれる

かたみぞと風なつかしむ小扇の要あやふくなりにけるかな → 思い出の風を味わう思い出の扇のかなめ壊れるほどに

いとせめてもゆるがままに燃えしめよかくぞ覚ゆる暮れて行く春 → 春はもう暮れてゆきますひたすらに燃えるがままに燃えてゆきたい

与謝野晶子自選の歌以外にも多くの優れた歌がある。夜の帳にささめき尽きし星の今を下界の人の髪のほつれよ → 星たちが恋のさきやき交わす今下界

の我是心乱れる

歌にきけな誰れ野の花に紅き否むおもむきあるかな春罪もつ子 → 青春の野に咲く花は恋の歌その紅色を否定しないで

臙脂色は誰にかたらむ血のゆらぎ春のおもひのさかりの命 → 臙脂色に渦巻く我が血、我が思い受け止められる男おらぬか

ふりかへり許したまへの袖だたみ闇くる風に春ときめきぬ → 「簡単にたたんでおくわ」春の夜の風にあなたのシャツが匂った

明くる夜の河はばひろき嵯峨の欄きぬ水色の二人の夏よ → 後朝（きぬぎぬ）の嵯峨の欄干に寄り添って我らの浴衣の水色の夏

つばくらの羽にしたたる春雨をうけてなでむかわが朝寝髪 → 春雨に濡れる燕の羽のしづく朝のへアムースに使いたい

八つ口をむらさき緒もて我れとめじひかばあたへむ三尺の袖 → ペアルックなんか着ないわ新しい服をくれるという人が彼

おもはずや夢ねがはずや若人よもゆるくちびる君に映らずや → 恋しいと思えよ思え若者よ燃えるくちびる瞳に映し

野茨（ばら）をりて髪にもかざし手にもとり永き日野辺に君まちわびぬ → 野ばら折り髪に飾って手に持て君待ちわびる夏の夕暮れ

湯上りの御風めすなのわが上衣ゑんじむらさき人うつくしき → 湯ざめしちゃダメよと我のむらさきの上着かければ君にはほれぼれ

春寒のふた日を京の山ごもり梅にふさはぬわが髪の乱れ → 春寒き二日を君と過ごす京梅に似合わぬ我が乱れ髪

消えむものか歌よむ人の夢とそはそは夢ならむさて消えむものか → この恋が消えてたまるか歌よみの一時の夢となってたまるか

この詩集は明治の人々にとって衝撃的だったに違いない。俵万智の「チョコレート語訳」も悪くない。

（一甲状腺外科医の徒然なる隨想）